両親の育児行動と子どもの発達に関する縦断的研究

平　山　宗　宏（東京大学医学部保健学科母子保健）
上　田　礼　子（　　〃　　）
小　沢　道　子（　　〃　　）
入内島　明　美（三　楽　病　院）
伊　藤　良　雄（　　〃　　）

1. 両親の育児行動と子どものアタッチメント形成および性別役割行動形成の関係に関する研究一夫が妻の分娩に立会った家族を中心として一

われわれは都内S病院において妻の分娩に立会った夫を対象として対照群と比較しながら育児行動，育児観，夫婦の関係，過去の生活史などの特徴を明らかにしてきた。

これらの対象者の子ども達が2才に達しはじめているので，今後は父親および母親の育児行動とそれらが子どもの発達とどのように，どの程度関係しているのかを縦断的研究方法により明らかにしてゆく。一方これまでの親子関係の研究はほとんど母子関係が中心であり，また家庭における父親と子ども，および母親やその他の人々と子どもとの関係という力動的な枠組の視点から実証的に把握されている資料は乏しい。

そこで妻の分娩に立会い，その誕生時から子どもの発達に関心が高い可能性のある夫の育児行動を中心に追跡し，対照群と比較しながら父子間および母子間のアタッチメントの形成，両親のいずれかを選好する傾向の有無などを検討する。またこれらの結果から一般に親（あるいは養育者）の育児行動のあり方が子どものアタッチメント形成や男性・女性の役割行動の形成にどの程度関与するのか，また，親の育児行動にはどのような諸因子が関与するのかを多角的に考察できると考える。

2. 親子関係形成上潜在的に問題をもつ者（ハイリスク者）の産褥期におけるスクリーニングに関する研究

母性意識は妊娠中から徐々に形成され始める。しかし，分娩・産褥期は母性意識の発達にとって1つの大きな危機（sensitive period）となることも知られている。核家族化がすすみ，施設分娩が大部分となった今日，分娩・産褥期の母親はさまざまな適応上の問題に直面している。

本研究は産科入院中の母親を対象として産褥期（退院前）に質問紙法による意識調査を実施し，母子関係（親子関係）形成の上で問題を持つ者（ハイリスク者）をみい出し，それをintervention に結びつけることを目的として実施する。母子関係（親子関係）の形成上潜在的に問題をもつ者を産褥期に発見し，intervention を行うことは母親側の育児ノイローゼの発生予防，あるいは子ども側の failure to thrive, battered child syndrome などの発生予防にも役立つと考えられるからである。

昭和58年度研究報告

妻の分娩に夫が立ちあう意義に関する研究(3)
── 育児語を中心として ──

筆者らは妻の分娩に立ちあう夫とその家族の追跡的調査をしてきており，今回は同じ対象者について子どもが1歳6カ月～2歳5カ月の時点で両親の育児語を中心に検討した。

対象と方法

対象は東京都内三楽病院にて1981年4月から1982年3月までに出生した子どもの両親299組である。方法は質問紙法であり，1983年10月に以下の内容を含む質問紙を父親と母親に対して別々に記入を依頼して回収した。質問内容には育児に対する考え方，昨日の具体的養育行動とともに"子どもとの対話"に関する7つの場面を設定して画き，それぞれの親が子どもに対してどのような言葉を使用するのか投影法に類似した技法で自由記述を求め分析した。

結果と考察

父親と母親との育児語の相関係数は0.37でやや高い相関を示した。また，育児語に関与する親側の諸要因の検討から父親の育児語は過去に妻の分娩への立ちあい経験の有無，現在の養育行動の多少（行為），子どもが自分になついているか否かという本人の意識に関係することが明らかになった。これらのことから育児語は親子相互作用のあり方を反映しており，これを評価する1つの指標として役立つ可能性が示唆された。